

冬に出会える生き物たち

1 ネイパル周辺で見ることのできる主な樹木 ※詳細は樹木図鑑などで確認を！



カシワの樹皮

エゾヤマザクラ

(バラ科)

大変加工しやすく、アイヌの人たちは工芸品を作るためにこの木の皮を利用した。「ワッパ」のタガをしめる部分や、燻製を作る際のチップとしても利用されている。

花 : 5月
果期 : 6月
高さ : 約 20m

ミズナラ (ブナ科)

施設周辺に最も多く見られる樹木。広く根を張り、保水力もある。秋にはドングリを落とす。北海道産のミズナラはヨーロッパへ輸出され、その仕上がりの重厚さからビールやウイスキーの樽材として重宝されている。また、若い樹木は椎茸の原木としても利用されている。外周が2~3mの木は、およそ150~200年ほどの樹齢がある。

仲間の**カシワナラ**は、ミズナラよりも樹皮の彫りが深く、冬でも葉を落とさず頑張っている。

花 : 6月
果期 : 8月
高さ : 約 25m



ヤマグチ (クワ科)

掲揚塔裏にある樹木。実が付くことで有名。しなって折れにくいので、アイヌの人たちは弓の材料としてこの木を使った。

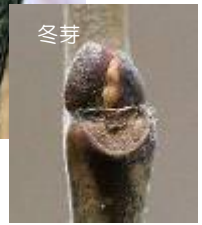
花 : 5~6月
果期 : 6~7月



イタヤカエデ (クワ科)

施設周辺でよく見ることが出来る。3月中旬に樹皮に傷を付けるとシラカバより甘い、たくさんの樹液が出てくる。

花 : 5月
果期 : 9月
高さ : 約 25m



イヌエンジュ (マメ科)

裏山で見ることが出来る。細長い鞘に小豆のようなマメが入っている。彫刻材や床柱として重宝されていて、街路樹としてもよく見かける。

花 : 7月
果期 : 10月
高さ : 約 15m



↑シラカバ



マカバ

オヒョウ (ニレ科)

裏山に何本か見ることが出来る。高くまっすぐ伸びているので見付けやすい。キハダとともに山にいる「魚」の一つ。器具材として使用されることが多く、樹皮は「アツシ」と言われ、アイヌの人たちの着物にも使われる。

花 : 4~5月
果期 : 6月
高さ : 約 25m

ハリギリ (せんの木、ウコギ科)

テニスコートの横や裏山に数本見ることが出来る。高く伸びているので見付けやすい。タラの木の仲間で若い芽は食べることもできる。肥沃な土地に生えることから、開拓時代の人たちは、その土地の栄養をはかるバロメーターとしてこの木を探した。

花 : 6月
果期 : 9月
高さ : 約 25m

シラカバ (カバノキ科)

施設周辺に何本か見ることが出来る。春には大量の水を吸い上げる。樹皮は、焚き付け材として今も重宝されている。やせた土地でも早く根付き育っていく。噴火した山の裾野に一番早く生えてくるのもこの木。

マカバというシラカバの仲間も、裏山に自生している。マカバは樹皮がシラカバに比べてやや黒く、主にピアノの材料として使われている。

花 : 5月
果期 : 8~9月
高さ : 約 25m

ネイバル周辺の樹木について

自生している樹木はミズナラが多く、同じ木が密集して生えていることから、原生林である可能性が高い。

夏は、ミズナラの木に葉が生い茂るためにわかりにくいですが、道路側（サロマ湖側）から見ると木の高さが同じである。これは、サロマ湖から吹く西風の影響で、このエリアにとっても強い風が吹くことの証明でもある（同じ現象が、濤沸湖でも見られる）。



樹齢が 100 年を超える大木や、絡まって自生する樹木など、裏山には手付かすの自然が残っている

2 主な野鳥 ※詳細は野鳥図鑑などで確認を！



オジロワシ 天然記念物・絶滅危惧Ⅱ類（VU）

褐色で、くさび型の尾が白く、くちばしは薄い黄色。ユーラシア大陸北部の沿岸地域に広く生息している。体長は約 80cm。翼を広げると 2m にもなる。施設周辺でもよく見かける。サロマ湖では氷下漁でとれた魚の「おこぼれ」をねらう姿も見られる。

サケやマスなどの魚、水鳥、アザラシの子などを餌とする。渡り鳥だが、北海道北東部で繁殖するものも確認されている。ハンターが撃ってそのままにした鹿の肉を食べて鉛中毒になってしまう個体も確認されており、問題になっている。



オオワシ 天然記念物・絶滅危惧Ⅱ類（VU）

東アジアの北部、オホーツク海沿岸や日本海北部の沿岸に生息している。黒褐色で、くちばしは濃い黄色で大きく、オジロワシよりも白い部分が多い。

オジロワシよりも少しサイズは大きめで全長が約 90cm。翼を広げると 2.5m ほどにもなる。日本最大の猛禽類で、世界でもトップクラスの大きさと言われている。オジロワシと同じ 1970 年 1 月 23 日に天然記念物に指定された。



オオハクチョウ

全長 140cm 前後。冬の使者としてシベリアなどから渡ってくる。全身が灰色の幼鳥も見ることができる。コハクチョウによく似ているが、オオハクチョウのほうがくちばしの黄色い部分が広く、体も一回り大きく首が長いのが特徴。

ネパール北見のマスコットキャラクター「クッピー」の名称は、サロマ湖で「クークー」と鳴くハクチョウの声をもとに付けられた。

コガラ

シジュウカラよりもやや小さく、ベレー帽をかぶり、のど元には蝶ネクタイのような模様があり、とてもおしゃれに見える。ハシブトガラとそっくりだが、ハシブトガラよりもくちばしが細く、尾の羽根の先が丸みを帯びている。



シジュウカラ

背中が緑黄色でネクタイをしているような模様がある。このネクタイの幅が狭いのがオスで広いのがメス。体長は 15cm 位。

※この他にも、沢山の種類の野鳥が観察できます
(エゾフクロウが姿を見せたこともあります)



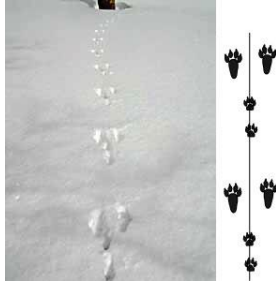
ゴジュウカラ

コガラよりやや小さくすばしっこく、木の幹を逆さになって降りることが出来る。目を横切る黒いラインも特徴的。

アカゲラ

キツツキの仲間で、冬の静かな朝に施設の近くでコンコンコン…と木をつつく激しい「ドラミング」の音が聞ける。おながが赤く、オスは後頭部も赤い毛で覆われている。一方、メスの後頭部は赤くないので簡単に見分けることができる。

3 主な動物の足跡（アニマルトラッキング用）



エソユキウサギ

足跡

後ろ足の足跡が並んでいる（ウサギは跳び箱を跳ぶように両足で踏み切ってはねまわる）。

豆知識

- 武器を持たない小さなウサギは、キツネやテン、ワシやタカなどから身を守るために、物陰に身を潜めるか、ひたすら早く走って逃げるしかない。より早く走るために後ろ足をしっかり地面につけて思い切りジャンプして走る。そのため、後ろ足の足跡が大きい。
- ウサギは切歯が発達しているので、ウサギが食べた冬芽、木の枝や皮は鋭い切り口になっている、まるでナイフで切ったようになっている。
- 足跡を追跡していくと、ぷつぷつと途切れることがあり、これを「止め足」と言う。よく見ると、戻った足跡が重なっている。追跡してきた敵の目を欺くため、休む場所に入る時も止め足を使う。



キタキツネ

足跡

キツネは肩幅が狭いので足跡が一直線上に並んでいる。一つの足跡は5cm四方くらい。前足に後ろ足が重なって跡が付いていることが多いのも特徴の一つ。コンディションが良ければ肉球や爪の跡を見ることもできる。

豆知識

- キタキツネの足の裏は毛がいっぱい！そーっと獲物に近付くための足音を消す役割をしている。
- キツネは深い森の中よりも、林や草地、畑が入り交じった環境を好む。そう考えると、北海道を開拓する中で、個体数が増えていったことにも納得できる。
- 1990年代以降、道東では、ダニの寄生による皮膚病の流行で、個体数が激減している。
※エキノコックスのおそれがあるため、キツネに近付いたり、糞に触れたりしない。



エゾリス

足跡

ウサギの足跡に似ているが、全体に小さく、前足の足跡がウサギのように縦にならず、後足のすぐ後に小さく横並びになる。

豆知識

- エゾリスは移動する時、木に飛び移ることが多く、地上に降りるのは餌を探す時である。
- 秋にクルミなどの木の実を地中に埋めておき、冬の間雪の下から掘り出して食べる。そのまま残ったクルミはやがて芽を出して生長するので、エゾリスが繁殖を手助けしていることになる。



ノネズミ ※写真は、エゾヤチネズミ

足跡

イタチの足跡よりも小さく、細いしっぽを引きずった跡がある。比較的簡単に見付けることができる。

豆知識

- 北海道には、エゾヤチネズミ、ミカドネズミ、エゾアカネズミなど多くの種類がいるが、足跡だけでは、その種を断定することはとても難しい。
- 雪と地面の間にトンネルを掘って生活していて、地面に蓄えておいた木の实等を食べる。ネズミが食べたクルミの跡は1カ所だけ穴が空いているのですぐにわかる。